

平成22年度埼玉大学入学式学長式辞(平成22年4月8日)

今年は春の訪れが早く、先週半ば過ぎには大学構内の桜も満開となりました。その後、雨が降って少し心配しましたが、桜はなお満開の名残を残しています。春爛漫の今日ここに、新入生の皆さんを迎えて入学式を挙行できますことは、私どもの大きな喜びであります。

本年、埼玉大学に入学した人は、教養学部163名、教育学部506名、経済学部368名、理学部223名、工学部478名で、これら5学部をあわせて1,738名になります。この他に、三年次に編入学した人が58名います。皆さんの多くは二十歳前の若者であります。社会人として生きるなかで抱いた問題関心を胸にして、大学の門をくぐった人もいます。また、このなかには、アジア地域を中心にして世界各国から留学してきた人達が42名含まれています。みなさん、入学本当におめでとうございませう。また、ご臨席いただきました保護者のみなさまにも、心からお祝い申し上げます。

さて、本日は、皆さんが埼玉大学で新しい生活を始める記念の日でありますので、最初に、本学の歴史について少しお話ししたいと思います。

埼玉大学は昨年1年をかけて創立60周年を祝いました。本学は、1949年(昭和24年)5月、第二次世界大戦の敗戦直後の教育改革により新制大学が発足した際、戦前の官立浦和高等学校と埼玉師範学校及び埼玉青年師範学校を母体にした、文理学部と教育学部との二学部からなる国立大学としてスタートしたのです。

このうち文理学部の母体となった官立浦和高等学校は、1921年(大正10年)に20番目の高等学校として創設されましたが、たちまちに全国有数の名門校となりました。官立浦和高等学校が、存在していた期間は30年に満たなかったのですが、その間に送り出した卒業生は非常に優秀で、各界で大活躍しました。昨年、創立60周年記念事業の一つとして埼玉大学の総合図書館に「官立浦和高等学校記念資料室」を開設し、同校の同窓会から譲り受けた貴重な資料を展示していますので、一度立ち寄って戦前の大先輩達の足跡を辿ってみてください。

もう一つの教育学部の母体になった埼玉師範学校は、1874年(明治7年)に創設されており、埼玉大学創立にいたるまでの間、実に70年以上にわたって、埼玉県下の小学校に多数の教員を送り出してきました。その教員養成の歴史が、新制大学の教育学部に引き継がれたのです。

少し脇道にそれますが、埼玉サッカーの歴史は、1908年に細木志朗という人がこの埼玉師範学校に着任したときから始まります。彼は早速サッカー部を創設して指導したほか、中学校でもサッカー部の指導に当たり、また埼玉師範学校で学んだ教員が小学校にサッカーを普及していきました。こうして戦前期に

サッカーは埼玉に確実に根付き、戦後に新制浦和高校の驚異的連勝となって引き継がれ、その伝統が埼玉県一県で浦和レッズ、大宮アルディージャというJリーグ二球団を擁することに繋がっていくのです。

話を戻しましょう。創立から60年が経過し、文理学部は教養学部、経済学部、理学部、工学部という四つの学部となり、創立以来の教育学部とあわせて、埼玉大学は現在五学部を擁するまでになっています。また、1973年の理工系大学院の設置を先駆けとして各学部の上に大学院修士課程が開設され、さらに1989年に理工学研究科に博士課程が開設されたのを初めとして大学院の拡充が進み、今ではすべての学部の上に博士課程まで有する大学院が整備されることとなりました。こうして埼玉大学は、総合大学、それも研究と教育を統合する大学へと変身を遂げてきたのであります。そして、皆さんの先輩は、埼玉大学での学びを経て、教育界、経済界のほか、学術や行政、文学、マスコミの世界でも大変活躍されています。

昨年、埼玉大学は、こうした歴史と伝統を踏まえ、研究と教育を両輪とする「知の府」として社会から一層信頼される大学を目指し、基本方針を定めて公表するとともに、それを具体化する施策に着手しました。その一つは、21世紀科学のフロンティアになっている脳科学研究に全学をあげてチャレンジするために、脳科学融合研究センターを設置したことです。もう一つ、脳に負けず劣らず重要な世界的研究課題になっている環境についても、環境科学研究センターを立ち上げました。これら二つの研究センターの開設は社会から注目され、各種のマスコミにも大きく取り上げられました。

他方、教育面では、学生諸君が高度な専門知識に加えて幅広い教養と国際感覚を身につけ、世界で活躍できる市民・職業人に成長できるよう、全学教育プログラムの一つとして、新たに特別教育プログラム「Global Youth」、略称GYをスタートさせました。このGYは少し高度な教育プログラムであり、一年間の海外留学、英語のスキル強化、海外の開発現場へのインターンシップが盛り込まれています。いま、二年次生、つまり皆さんの一年先輩に当たる学生たちが全学で10名、このプログラムの第一期生として参加し、今夏からの留学に備えて準備に入っています。

以上述べましたように、埼玉大学は、「知の府」として磨きをかけようとする途に努力してきました。しかし、大学がいくら組織や教育プログラムを充実しても、皆さんが、つまり学生諸君がそれを活用して学び、楽しんでくれば、意味がありません。では、皆さんは、大学でどう学べば、「学び」を楽しむことができるのでしょうか。大学における学生諸君の生活はいくつもの面を持ちますが、本日は大学における「学び」に的を絞ってお話したいと思います。

さて、大学における「学び」については、丸暗記や詰め込みを否定する議論がしばしば見受けられます。しかし、若いときほど脳は柔軟で、なんでも吸収する力があります。私は、丸暗記や詰め込みを一概に否定すべきでないと考えます。英語スキルの修得などでは、大いにやって下さい。

しかし、たしかに教えられたことをただ丸暗記するだけでは、大学における「学び」の醍醐味を味わうことはできません。「学ぶ」という日本語には、受動的な響きが付きまっています。皆さんもそう思うでしょう。それは、受験勉強という形での「学び」の姿を反映しているからです。でも大学が求める「学び」は違います。大学では、「学び」は「考える」ことと一体でなければなりません。

大学には、皆さんがこれまで出会ったことがないような知識が膨大に蓄積されています。そして、大学は、教育をとおして、その内容を皆さんに提供しますが、皆さんは、与えられた知識や情報を単にためこむだけではなく、じっくりと考え、自分にはない、新しいものの問い方、見方、考え方を学び取ってほしいと思います。そこから、今までになかった眼で世界を見ることができるようになるのです。

こう言いますと、皆さんも、『論語』に収録された2500年ほど前の孔子の言葉が浮かんでくるのではないのでしょうか。

「学びて思わざれば、即ち罔し。思いて学ばざれば、即ち殆うし。」

加地伸行氏の現代語訳によれば、これは「知識や情報を〔たくさん〕得ても思考しなければ〔まとまらず〕、どうして生かせばいいのか分からない。逆に、思考するばかりで知識や情報がなければ〔一方的になり〕、独善的になってしまう。」（全訳注：加地伸行『論語』講談社学術文庫）ということです。少ない字句でよく本質を突いているものだと感心します。

大学におけるこのような「学び」は講義の場でも必要となりますが、その仕上げになるのが、各学部に設けられている卒業研究・卒業論文です。卒業研究は、それまでの「学び」の積み重ねを生かして、自分で「問い」を立てるところから始まります。これがテーマ設定です。そして、徹底して調べ、考えぬいて自分なりの解に到達する。それを文章表現して論文に仕上げる。出来不出来はあるにしても、このように自ら問いを立て、論文という形で自分を文章表現する「知」の営みは、認識を発展させる上でとてつもなく大事なことであり、それはもう研究と言わなければなりません。「問うを学ぶ」と書いて学問となる所以です。

ところで、こういう「学び」においては、読書が不可欠となってきます。本には、時代を超え、地域を越えた、多様な知識が埋め込まれています。読書は、

そういう知識の宝庫の扉を自分で開こうとする行為に他なりません。かつて、大学生＝読書するもの、と言われていました。講義で使用されるテキストや参考文献だけでなく、古典とされる本や評判になっている本にチャレンジして下さい。図書館がきっと役に立つでしょう。今、埼玉大学の図書館には79万冊以上の図書が収められています。これまで留学生諸君向けの図書が手薄でしたが、その改善のために、今春新たに500冊を購入して、書架に並べてもらいました。どうか、活用してください。

でも、皆さんの中には、たくさんある本の中から何を選んで読めばいいのか、わからないという人もいるでしょう。そこで、本日は講義がまだ始まっていませんので、大学生らしい教養の入門編として、ジャンルの異なる三冊の本を、私から新入生の皆さんに紹介したいと思います。その一つは、ロゲルギストの書いたエッセイ集、『新装版 第五 物理の散歩道』（岩波書店）です。ロゲルギストとはどの国の人かと疑問に思う人もいるでしょうが、知る人ぞ知る日本人物理学者のグループの名前です。この本には「月では昼間星が見えるか」という作品以下、16のエッセイが収められていますが、どのエッセイも皆さんに、複眼的な発想の大切さ、面白さを教えてくれるでしょう。高度な物理の知識が無くても読めますので、文系の人にもお勧めです。

二冊目は、『武満徹 エッセイ選』（ちくま学芸文庫）です。武満さんは、ノヴェンバー・ステップスで世界中の音楽愛好家に知られる現代音楽の大作曲家ですが、彼は名作家でもあり、たくさんエッセイを残しています。このエッセイ集は彼の死後に小沼純一さんが編集したもので、一つ一つが素晴らしいのは勿論ですが、纏めて読んでみると、武満さんの多彩な文化人という大きな姿が見えてきます。そして、世界と日本の伝統から環境、自然、さらには社会問題に至るまで、敏感に反応する武満さんの感受性の鋭さ、「他者」との「出会い」の持つ意味の広がりや武満さんの思索の深さに、驚かされます。音楽好きの人でなくとも、引きずり込まれるように読めること、請け合いです。

三冊目は、池澤夏樹さんの小説、『静かな大地』（朝日文庫）です。池澤さんは理学部と工学部が分かれる前の本学理工学部で物理学を学ばれた方で、芥川賞はじめ主だった文学賞を総なめにされた小説家であり、詩人であり、文明評論家であります。昨年からは、芥川賞の選考委員会の委員長を務めていらっしゃいます。この小説は第三回親鸞賞を受賞した歴史小説で、アイヌとの共棲を夢見て北海道に入植した、池澤さんご自身の先祖をモデルにした物語であり、アイヌの人々の物語であります。少し重い小説ですが、日本が通過してきた近代の意味を、時代を移し、場所を移して、今までとは違う眼で見直す格好の素材を提供してくれています。新入生の皆さん。皆さんの先輩のこの渾身の作品に挑戦してみてください。

ところで、大学での学びに関して、もう一つ追加しておく必要があります。それは、他者と議論することも重要だ、ということです。私が言うのは、決してディベートで相手を言い負かすことではありません。埼玉大学には日本全国から、多様な考え方をする人が多数入学してきます。世界各国から留学生も来ています。自分とは異なる知識を持ち、異なるものの考え方をする人の意見に接すること、それは今の自分を相対化し、「学び」を深める上で非常に有効なのです。それは、いま皆さんに推薦しました三冊の本の視点とも重なるものです。専攻を異にする人との議論を大事にして欲しいと思います。大学時代にそういう議論をしあった人同士は、大学を卒業してからも生涯続く友人となるでしょう。

いま世界には、解決を求められている問題が山積しています。宗教対立や民族対立に基づく紛争やテロ、アメリカ合衆国のブッシュ前大統領が世界を憎しみと恐怖に引きずり込んだ戦争、地球温暖化、生態系の危機、貧富の差の拡大、地球人口の急激な増加、水と食糧の分配の不均衡、核兵器の蓄積とその分散など、どれも難しい問題です。日本でも、経済危機からの回復の遅れ、貧富の格差、少子化、巨大な財政赤字、年金問題、米軍基地の問題等々、これらの問題が私たちの生活の安全と安心を脅かしています。昨年、アメリカ合衆国史上最初の黒人大統領としてオバマが登場し、日本でも鳩山連立政権が成立した瞬間には、これらの問題がすぐにも解決に向けて前進するだろうという期待を抱かせましたが、今では、雲行きが少し怪しくなってきました。

皆さんは、日本と世界の将来について不安に駆られることも少なくないと思いますが、これからの四年間、どうか「学び」を深め、判断力を養ってください。それが、こういう時代をたくましく生きていく力の源泉となるでしょう。

さて、私は学長に就任しました一昨年4月から、埼玉大学に学ばれた皆さんの先輩を入学式にお招きし、特別講演をお願いしております。一昨年は、先ほど紹介しました池澤夏樹さんにおいでいただきました。昨年の入学式には、JR東日本でSuicaの開発責任者として活躍され、NHKプロジェクトXでも紹介されました、椎橋章夫さんをお招きしました。今年は、現在ガボン共和国大使で、コンゴ共和国大使と赤道ギニア共和国大使、サントメ・プリンシペ民主共和国大使を兼任していらっしゃる、加藤基さんに講演をお願いしています。本学は、いま基本方針の一つに「埼玉大学は国際社会に貢献する」ことを掲げています。その意味で、加藤さんのような方が卒業生の中にいらっしゃることを大変うれしく思います。今日は、私たちがあまり知らないアフリカを舞台とす

る日本の外交と国際貢献について、興味深いお話をしていただけたと思いますので、皆さん、期待してください。

最後に、皆さんがこれからの四年間、目標を高く持って「学び」に励み、逞しく成長されることを祈念して、私の式辞といたします。

平成 22 年 4 月 8 日

埼玉大学長 上井喜彦